

第97回

現代の黙示録

田中康夫『33年後のなんとなく、クリスタル』

小林秀雄はその著『ドストエフスキイの生活』(一九三九年)の中のゴオゴリを論じているくだりでこんなことを言う。「いかに生くべきかという文学以前の問題が、彼の文学を乗越えて了つた」と。小林秀雄にとつてはいや日本の伝統的作家たちにとつてはと異い換えたほうが分かりやすい。「いかに生きるべきか」は文学以前の問題なのである。では文学とはいつたないんなのかというと、それは「いかに生きるべきか」という生つちろい命題をはるかに越えた高い所にある、ある名状しがたい文芸的美であるということである。そういう考え方は昭和の軍人たちの得意文句「国体」に非常によく似ている。論理的証明機能

のない、きわめて情緒的確信でしかないところまでそつくりである。明治以降の日本には「文学」というなにやらいわく言いがたい「文芸的な美」を身にまとつた幽霊が存在しつづけている。むろん文学の世界では暗黙の了解事項である。それは肯定的に言うなら日本文学の独自性と特殊性を保つ伝統であり、否定的に言うなら閉鎖性と独善性を醸成する元凶でもあるのだ。

話を簡単にするためにヘミングウェイを例にとろう。ヘミングウェイは「日はまた昇る」(一九二六年)の中で主人公のジェイクにこう言

わせている。「おれの知りたいのは、どう生きるかということだ。どう生きるかがわかつたら、人生の意義というやつもわかるかもしれない」と。ジェイクの職業は新進の作家である。その作家が、小林秀雄言うところの文学以前の問題にかくも思い悩むのである。

そんな文学世界へ一九八一年、田中康夫は文学以前の問題にすら無関心なとき作品『なんとなく、クリスタル』をひっそり登場した。その作中人物は言う。「クリスタルか……。ねえ、今思つたんだけどさ、僕らつて、青春とはなにか! 恋愛とはなにか!なんて、哲学少年みたいに考えたことつてないじゃない? 本もあんまり読んでないし、バカみたいになつて一つのことに熱中することもないと

思わない? でも、頭の中は空っぽでもないし、曇つてもいないよ。ね。醒め切つてい

ここには証明不能な「文学」もないし、「いかに生くべきか」という文学以前の問題」もない。ただ生きてそこにある青春という名の人生だけがある。一見、夏の青空のような文学が出現したのである。田中康夫はこれを「一橋大学在学中に、サークルのトラブルで一年間の停学処分を受けたその暇を利用して書き上げた。そしてそれを河出書房新社が主催する「文藝賞」に郵送で応募した。それが五月で忘れ

われわれは 何処へ行くのか  
われわれは 何ものか

# 花咲く大地に

イラストレーション  
宇野亜喜良

つぽでもないし、曇つてもいないよ。ね。醒め切つてい

湿つた感じでもないし、それに、人の意見をそのまま鵜呑みにするほど、単純でもないしさ。



# なかにし礼

Tanaka Yasuo

Essay



クリスタル」という言葉は流行語にまでなり、田中康夫は一躍文学界の若きスターとなった。田中康夫は文学の世界にクーデターを起し見事に成功した。いや実は文学的革命と呼んでもいいのだが、あまりにオリジナリテイが強すぎて誰も追従することができなかつたがゆえにそうはならなかつた。

この小説のヒロイン由利は女子大生でかたわらモデルもしている。美貌とスタイルに恵まれ、仕事もそこそこ忙しく、カッコいい理解ある男と暮らしてもいて、一九八〇年代の繁栄を満喫している。たまには浮気もする。自分のセンスにとつて快いものだけを味わい身辺において生活するという由利の日常が由利自身の語りで進行していく

のだが、そこにはなんとといえないモノトーンなアンニュイがあり、このアンニュイの中身はなんだろうと私は読みながら不思議であつた。で、この小説の最大のキモは四百四十二にもよるその注にある。本を開いた右ページが本文であり、左ページが注なのである。しかもその注は微に入り細をうがち的確であり、皮肉がきいていて。たとえば「NHK放送センター」大日本帝国のタクシー（大和・日本交通・帝都・国際）の四社以外のタクシーは客待ちをお断りします。開かれた国営放送局、みなさまのNHKからのお知らせでした」といった具合だ。つまり作者自身が自ら登場して人間を観察し、世相を批評し、文化を論じてみせるのである。それだけ

# 接吻を

くちづけ

でも画期的だと言わなければならぬ。そしてもつと驚くべきことは、小説のラストである。そこには「人口問題審議会『出生力動向に関する特別委員会報告』と『五十四年度厚生行政年次報告書（五十五年度版厚生白書）が無機質に置かれている。これを見た瞬間、私はこの小説が漂わせるモノトーンなアンニュイの正体が分かつたような気がした。現在日本の出生率の低下と人口減少率は、この時の楽観的予想をはるかに下回り、暗澹たる状況にある。『なんとなく、クリスタル』の著者は現在の貧困日本をすでに読み解いていた。なんとなくどころか、猛烈に冴えわたつていてクリスタルそのもののように明晰だつたのである。一見、夏の青空のように思えた空には実は暗雲が垂れこめていたのだ。

あれから三十三年たつて、田中康夫が書いた『33年後のなんとなく、クリスタル』（『文藝』連載、11/20発売、河出書房新社）は作者が過去の作中人物と再会するという手の込んだ仕掛けの小説である。主人公は現在の作者自身であり、一日四回、愛犬ロッタの散歩を欠かさない作家である。その彼が道行く女性に声をかけられる。「まあ、ヤスオちゃん、お久しぶり。いやだあ、また忘れちゃつたの？ 江美子。由利の友達だつてば」

快調な滑り出しである。だが、この三十三年間の日本と田中康夫を見てきた私たちにはとても怖い小説である。著者はその間、長野県知事をやり、参議院議員になり、衆議院議員になり、「新党日本」を作つたり、落選したりと目まぐるしいが、まことに正直に己をさらしてみせている。その透明性こそクリスタルの証明と思ひ、私は感動する。日本はもはやアンニュイどころでない絶望の淵に來ている。作者は「微力だけれど無力ではない」と言いつつ黄昏の光に向かつて歩いていく。そのうしろ姿は文学以前の問題としての文学こそが文学なのだという決意にみちている。いや、この本は現代の黙示録かもしれない。

われわれは  
何処から來たのか

